裏方のひと―北野博美伝②

内海宏隆

（承前）さて、加藤實さんとお話ししていた最中のことである。北野という姓の親戚については全く記憶にないとおっしゃっていたのだが、《北野博美》の本名文次郎という名前を持ち出したところ「文次郎さんという名前は聞いたことがある。」との証言を得た。（後日加藤實さんより以下の書簡をいただいた。「ゆり祖母の話題には増村家滝沢家岡田家のことは度々話しておりましたが残念ながら北野家の事は話題に出てきたことが無かったようです。只時折滝沢豊叔父が訪れて来た時祖母の口から文次郎と云う人の事を話していた事を覚えていますが当時子供だった私はその人がどうゆう（ママ）関係の人かわかりませんでした」・更に後日電話で「あれから私もいろいろと思い出しましてね。確か『北野の文次郎は（放浪癖のあった人のようで）あっちへ行ったりこっちへ行ったりしている』ような話を祖母たちがしていたのをはっきりと思い出しました」との証言も得られた。ここで注目したいことは「北野の文次郎」と苗字つきで呼ばれていることである。）

一方で滝沢さだ子さんが西島立枝さん（明治39年2月5日生まれ。東篁の次女ゆりの子息弘の娘・北野博美の子供たちからするとま

たいとこ関係にあたる人）に問い合わせて下さったところによれば立枝さんも「『文次郎さん』の名前は聞いた事があるそう」「でも、どう言う関係か、どんな方かは知らないとの事」だった。

更に滝沢さだ子さんの成山和子さん（明治44年10月3日生まれ。滝沢豊の次女・北野博美の子息たちからするとまたいとこ関係にあたる人）への問い合わせの結果、成山和子さんも「文次郎」という名前は聞いたことがあるということが判明した。

系図の上でいうといずれも《北野》の姪（従兄弟の子供）にあたる人々から「文次郎」という名前の記憶を辿れたことになるのだが、どの方も現在八十歳を越す御高齢である。概ね逆算すると「文次郎」叔父生存の間、彼女たちは十～二十代の娘時分にあったわけである。戦前の道徳感覚からすれば、大人の話に聞き耳を立てていたり・ましてや横から口を出したりすることはご法度だったろうし、また「家」とか「一族」に対するよほどの関心が普段からなければ、それが本人の人生にとってもかなりの重大事でない限り（「文次郎」の行状などが）のちのちまで彼女らの記憶に残ることはなかっただろうと推測される。

加藤實さんの発言が現在のところ《北野↑↓滝沢》／《北野↑↓吉田》ラインを繋ぐ最も有力な証言である。

《北野博美》の主宰する『性之研究』（第二巻第四号・大正10年1月）に「内證ばなし―親しみ深き會員諸氏へ―」と題された文章がある。そこには雑誌編集と経営とを一手に引き受けて一年の間やり遂げた自負と苦労とが語られている。その一節にこんな言葉がある。「若しも私が此の事業で多少でも儲けられたら之ほど近親者から馬鹿扱ひにはされずに濟むだらう。自分ではそれほど馬鹿者だとは思つてゐないが、それでも近親者の眼からは生活能力のない、コンマ以下位にしか見られてゐない。それは何の爲め？　滿更無理でもないと思ふことが自分にもある。もう三十に近い齢をしながらまだ時々には近親者の前に言ひ難い言葉を並べて澁い顔を見なければ一家を支へて行くことが出來ない男である。馬鹿扱ひをされてもそれは仕方のないことであらう。」

あくまで憶測の域をでないが《北野博美》＝「文次郎」の存在は吉田東篁一族からするとある種タブーのような存在ではなかっただろうか。文次郎のしていた仕事が『性之研究』に代表されるようなある種専門分野のものであったとしたら、当時の道徳感覚からすると（ましてやそれが親戚関係の間であったなら）眉を顰める者も少なくなかったかもしれない。加藤實さんの「当時子供だった私はその人がどうゆう（ママ）関係の人かわかりませんでした」という証言や、西島立枝さんの「どう言う関係か、どんな方かは知らない」という発言などは、北野自身の「近親者から馬鹿扱ひ」「近親者の眼からは生活能力のない、コンマ以下位にしか見られてゐない」という叙述とどこかで通底する部分があるように筆者には思えてならないのだが如何だろうか。

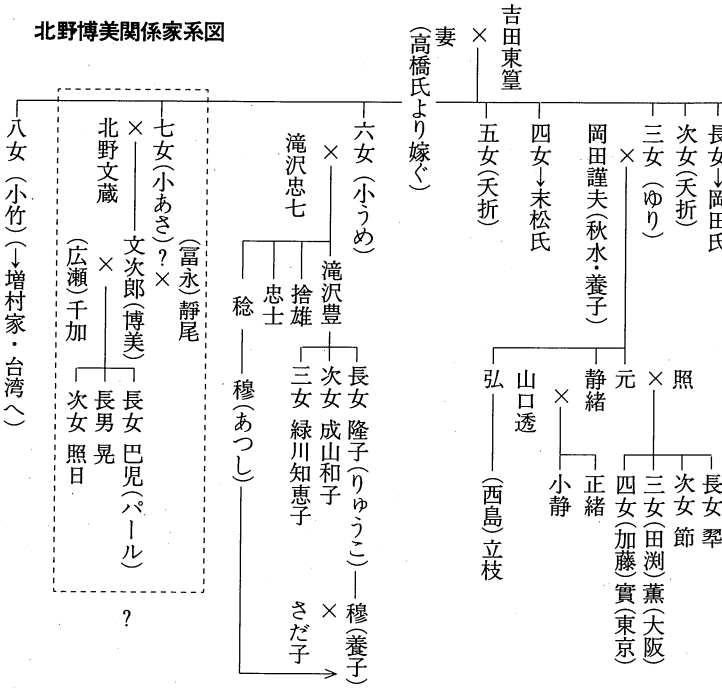
後日談。ひょんなことから《北野博美》の長男晃氏との会見に成功した。（晃氏は大正八年三月四日生まれ、東京都府中市に在住の民俗研究家。著書に「武蔵府中の民俗」（中

央公論事業出版　昭和63）がある。）戸籍の写しから北野文蔵の妻＝《北野博美》の母親の名前は《小あさ》ということが判明した。東篁の六女・八女がそれぞれ《小うめ》《小たけ》と名付けられていることから、命名の仕方に一つの共通性が見出せる。滝沢さだ子さんや加藤實さんにも「おばあさんの口から《小あさ》という姉妹のいたことをお聞きになったことはありませんか」と尋ねてみたが知らないそうである。加藤實さんに冗談交じりで「《小あさ》でなくって《小まつ》だったりすると『松竹梅』がうまくそろうんですけどね。」と言うと「いやぁ、私の姉妹の名前はそうやってつけられているんですよ。松の翠、竹の節で《みさお》、梅の薫、そして私で実がなると言うふうに。」とお答いただいた。東篁一族はなぜか女系家族が多く、自身も八女設けているし、滝沢豊は三女、吉田元も四女設けている。ひょっとすると元の子女命名の方法もある程度先代に肖ったものかもしれない。東篁六女の名前にもゆり＝百合＝植物の名前が命名されており、「あさ」も麻に通ずることからこれも一つの共通項と捉えてよいだろう。また晃氏によれば《北野》は《博美》という筆名のほかに《山守晃三郎（晃五郎）》《赤井久子》なる筆名（註8）を名乗っていたそうである。《山守（やまもり）》という名字は吉田東篁の隠居後の号山守（やまがみ）を捩ったものであり、こんなところからも《北野博美》の「祖父・吉田東篁」への意識が感じらせる。ちなみに晃三郎・晃五郎の「晃」は子息の名前からとられたものである。また《赤井》は酒飲みである自身の風貌を卑下したところから《久》は妻・千加の母親の名前からとられたそうである。また「福井の縁者で東京に住む人」として晃氏は「東京水道局に勤務する滝沢忠志さん」「従妹で岡田姓の方、淀橋小学校前に住み文房具店をひらくひと」を挙げて下さった。「滝沢忠志」は滝沢忠七の三男「忠士」の覚え間違いである。滝沢忠士は東京市役所（現在の東京都庁）に勤務し（治水・橋梁建設などの）土木関係の仕事に従事していたそうである。（晃氏はそれを「東京水道局」と勘違いされていたようだ。）また岡田姓の親戚で東京都内で文房具商を営んでいたものがいたことも判明している。

細部で不明確・不正確なところはあっても、北野家側の証言（晃氏談）と吉田一族（主に滝沢一族）側の証言はほぼ一致するところから、北野家はやはり吉田一族の累と考えてよさそうである。

以上「高崎年譜」、林長孺撰「東篁山守君碑」、滝沢さだ子さん、加藤實さん、北野晃氏のお話しなどを総合して系図を作成してみた。まだまだ不明の点も多いので今後も補なってより確かなものにしていく必要はあると思う。どんなわずかなことでもご存じの方は情報を提供していただきたいと切に願う次第である。（これは滝沢さだ子さんからのまた聞きだが、西島立枝さんのお話しだとご自分と静緒さんは従姉妹関係にあるということである。すなわちゆりと静緒との間に一代女が入るというのである。加藤實さんの証言並びに滝沢さんから送っていただいた「二静遺稿抄」（註9）の「はしがき」の叙述「妻（静緒）は幼時漢学を王父東篁先生に受け」からすると静緒は東篁にとって孫にあたることになると思う。西島立枝さんの記憶違いと考え

北野博美関係家系図



られないこともないが、この辺りのことは不明。）

3　検証作業②　学生時代

「高崎年譜」の次なる問題点は《北野》が「父の士族の商法―機織業の失敗により県立福井商業学校中退」並びに「従兄滝沢豊（朝日新聞社福井支局長）により、十四、五歳より新聞記者生活に入り、云々」という「事実」である。『福井大百科事典』によれば福井県は「適温・多湿という気候のためか、太古から優美な絹織の業を営み、『続日本紀』には七一二年（和銅五）に朝廷が越前国に綾錦織物の生産を命じたことが記されて」おり「江戸時代には松平家の手厚い保護のもとに奉書紬が発展、明治20年代にはバッタン機を大量導入して羽二重織物工業を興隆。その後、力織機の導入を進め、工場制手工業から機械制工業へ脱皮、一九三〇年（昭和五）代には「人絹織物王国」の名を世界に轟かせた。」ということだ。一九八九年（平成一）における企業数は一六一一、機械台数四万八一〇六台、織物生産量八億八二二万㎡ということで現在なお機織の盛んな都市なのである。北野文蔵が商売に機織業を選択したというのはなにぶんにも福井の土地柄によるところが大きかっただろう。

まず《北野博美》の福井商業学校への在籍の有無に関して前述・福井商業高等学校で校史の編纂に携わっておられる松田平男先生にFAXで問い合わせをした。

拝啓

福井商業高等学校　松田平男先生

突然お電話を差し上げた上に身勝手なお願

いを致しました。申し訳なく思っております。北野博美さんについて簡単なプロフィールを記します。

◆北野博美年譜（「高崎年譜」を整理した形で掲示・省略）

無名時代の折口信夫と出会い、折口の出世作『古代研究』の口述筆記を担当した縁の下の力持ち的存在です。また日本民俗学勃興期を支えた雑誌『民俗芸術』『日本民俗』などの編集者でもあります。折口信夫の周辺にいた大変重要な人物なのですが詳しいことはあまりよくわかっていません。

先生にお伺いしたいことは①～⑤の五点です。

① 明治の末頃に北野文次郎（博美）なる入学者がいたかどうか？出身小学校・中学校はどこか？

② 入学年月日と退学年月日（退学の具体的理由。高崎作成年譜によれば「父親の士族の商法―機織業の失敗により福井商業学校中退」となっていますがその真偽のほどは？）

③ 吉田東篁の子孫で北野家なる家系に嫁いだものがいるかどうか？またその子孫は福井市内に現存するか否か？

④ 朝日新聞社福井支局長滝沢豊なる人物の素性。

⑤ ③④についてご不明の場合、どなたか郷土史をご研究なさっている方でお知り合いがいらしたらご連絡先をお教えください。

北野氏は今後の折口信夫研究ひいては民俗学研究の発展の上でも欠かすことのできない存在であります。①～⑤以外のどんなに細かなことであっても有益な情報となりますので是非ともお知らせください。ご多用中のところお手数をお掛けして申し訳ございません。よろしくお願い申し上げます。

敬具

平成八・五・一三

攻玉社中学・高等学校国語科　内海　宏隆

これに対する返事は左記のとおりである。

内海宏隆先生

前略　ご依頼の件、大変返事が遅れまして申し訳ありません。心当たりの郷土史を研究している人に聞いてみましたが、成果はありませんでした。ご質問につきましては次のとおり回答します。

①について

不明

②について

福井商業高校の創立は明治41年ですから、明治26年生まれの北野博美は年齢的に在籍していたことになるかと思いますが、当時の学籍に関する記録が四散しており確認できません。

③について

不明

④について

滝沢豊は年譜のとおり朝日新聞福井支局長在職中の昭和10年、53歳で急性肺炎で死去した。彼には3人の子供（三姉妹）がおり、長女が婿養子をとり、戦後、文具店を開業し現在に至っている。しかし、その長女も他界し、お子さんの代になっており、北野博美についての情報はありません。二女が84歳でご存命なので、お会いしてお聞きしましたが同じ結果でした。参考までに「滝沢文具店」の住所

を記しておきます。《住所》・《電話番号》省略

⑤について

紹介できる心当たりの人はおりません。

以上、誠にご期待に添えない結果になり申し訳ありません。ご研究の進展をご祈念申し上げます。

草々

平成八・六・一〇

そののち、福井県庁県史編纂室のほうに同様のことを問い合わせたがやはり答えは不明ということであった。（晩年の北野から民俗学の手ほどきを受けた新井恒易翁《大正元年十二月十八日生まれ。民俗芸能学会》は「大戦後、学籍簿は処分されたので、どこでも不明になっている。同年輩の卒業生も今ではほとんどいないだろう。」とお答え下さった。）結局現段階では《北野博美》の福井商業学校入学の証拠も中退の事実もつかめないままである。

（この稿続く）

註

8　「日本民俗学文献総目録」「民俗学関係雑誌文献総覧」によれば《北野》の変名による論稿は左記の通り。

山守晃三郎「案山子に寄せて―造型芸術発生の跡を懐ふ―」（『民俗芸術』第一巻第十一号　昭和3年11月）

「言ひならはしの中から」（『日本民俗』第二巻第六号　昭和12年1月）

「デロレン祭文に観る」（『民俗芸術』第二巻第一号　昭和4年1月）

山守晃五郎「文身隆盛の時代」（『民俗芸術』第二巻第八号　昭和4年8月）

山守生「団子つき」（『日本民俗』第33号　昭和13年8月）

山森生「月見習俗―畠物盗み」（『日本民俗』第33号　昭和13年8月）

赤井久子「民俗芸術史上に観る女性」（『民俗芸術』第三巻第九号　昭和5年9月）

このうち赤井久子名義で書いた「民俗芸術史上に観る女性」は柳田国男の目に留まり「すごい女性民俗学者が出てきた」と称賛されたという。（北野晃氏談）

9　吉田東篁の次女ゆりの娘静緒の夫山口透氏が早世した妻静緒と娘小静の二人の遺稿短歌をあつめて大正十三年に台湾日日新報社から出した本

（うつみ　ひろたか）